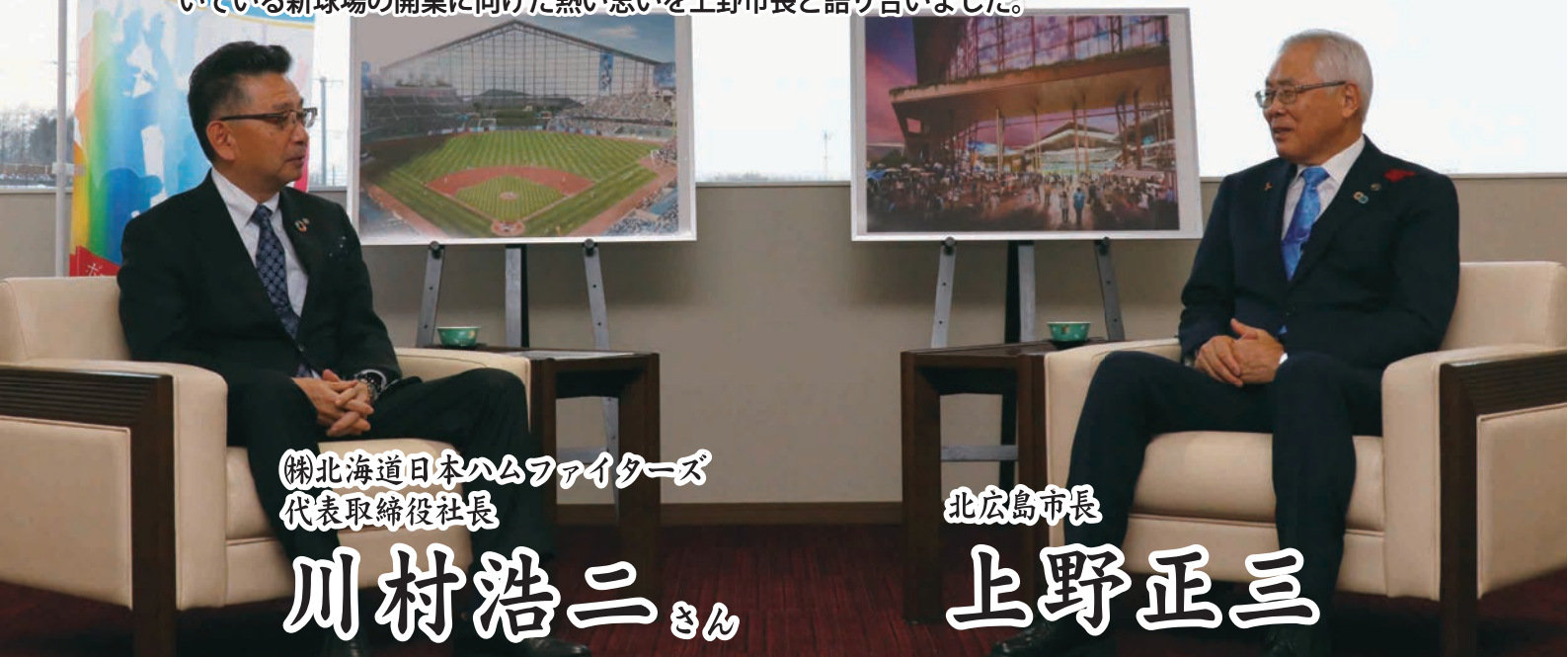


いよいよ本格始動！

北海道のシンボルとなる空間の創造へ

北海道日本ハムファイターズのボールパーク（以下、BP）構想実現へ向けて、道路や水道などのインフラ整備や土地の造成工事が開始しました。ファイターズの川村社長が市役所を訪れ、着実に近づいている新球場の開業に向けた熱い思いを上野市長と語り合いました。



（株）北海道日本ハムファイターズ
代表取締役社長

川村浩二さん

北広島市長

上野正三

北海道と北広島市の印象

——まずは川村社長、北海道と北広島市の印象を教えてください。

川村 北海道は豊かな自然、そして食材の宝庫というイメージで、日本ハムグループにとっては非常に身近に感じる地域です。平成16年からファイターズの本拠地があり、それ以外にも大きな養豚・養鶏場、ハム・ソーセージや冷凍食品の工場、水産会社があるなど、グループの生産拠点になっていて、親近感のあふれるエリアだと思っています。

北広島市については、新球場の候補地となる前までは、新千歳空港から札幌に行く中間の都市ということと、広島県からの入植者が多かったという地名の由来からの知識でした。候補地になつてからは、親しみも湧いていますし、頼もしい事業パートナーだと思っています。実際にまちを訪れると駅前に図書館や文化ホールがあり、住みやすいまちだという良い印象を持っています。

上野 道民であれば普通に感じている食材の味が、道外の方にとっては素晴らしいと言われるますね。改めて北海道は素晴らしいところだと思います。

BP構想との関わり

——BP構想に関わるようになった時期はいつ頃ですか。

川村 初めてBPの構想を聞いたのは4年前だと思います。日本ハムの取締役として球団が構想を持っているというのを聞く立場で報告を受けていました。おととしの4月から1年間日本ハムの中でスポーツを担当する責任者になり、BPに主体的に関わることになりました。

BP構想を聞いて

——最初にBP構想を聞いた時の印象を教えてください。

上野 私が役所で働き始めた50年前に総合運動公園の計画を作成しましたが、ほかの事業を優先してなかなか





市役所5階展望ロビーから建設予定地を眺める2人。
その視線の先には同じ未来を見ている

か手が付けられないままでした。計画を立ててから約50年が経ち、37ヘクタールの総合運動公園予定地をそのままにしておいて良いのかという思いがありましたので、新たに球場を建設するという話を聞いた時、「これだな」と思いました。

川村 最初聞いた時はかなり壮大な計画であり、日本ハムグループでやり切れるのかなと思いました。実際に北広島市と話を進めていくと、一緒にやっていく頼もしいパートナーを得たということで良い方向に行くのではないかと確信を得ているとこ

球団社長に就任

——新球場建設を控えたこの時期に社長に就任されたましたが、どのような思いがありましたか。

川村 球団の社長になったのはBP構想があるからこそだと思っています。社会的にも大きな事業ですし、日本ハムグループにとっても大きな投資となるため、現地で指揮を執れるということに社長就任の要請があったのだと思っています。ただ、夢とロマンがあるということに前向きに捉える気持ち7割と、大きな責任で身が引き締まる気持ち3割というのが正直な実感です。

新会社の役割

——昨年10月に設立された新会社(株)ファイターズスポーツ&エンターテインメントはどのような会社ですか。

川村 もちろん球場を保有・運営する会社なのですが、単に球場を持つということではなくソフトの部分で、ファイターズというコンテンツ・ブランドを活用して新しいスポーツエンターテインメントを作っていく、新しい野球の観戦文化を作るといったのが一つ。さらに、まちづくりも手掛けるということで従来にない事業

を推進していく、新しい価値を生み出すといった会社を目指さなければならぬと思っています。

BPへの期待

——BPについて一番期待することは何ですか。

上野 やはり根底にあるのは、この計画をいかにまちづくりにつなげていくか、これから少子高齢化と人口減少が進む時代に、いかに市の発展につなげていくかということです。市民の皆さんに夢と希望を与えるために、必ず成功させなければならぬと思っています。

川村 ファイターズの企業理念は、スポーツコミュニティの実現という、スポーツが生活の身近にあり、そこに住む方の心と体の健康を育む空間を作ることです。企業理念の実現に向けて、ぜひとも成功させるという思いは市長と一緒にです。成功するためには地域やファンの皆さん、共同事業者やパートナー、それぞれの方々と共に取り組んで、共に成功の喜びを分かち合う、それが大切だと思っています。

北海道のシンボル

——BPのコンセプトに「北海道の

シンボルとなる空間を創造する」とありますが、どのように考えていますか。

川村 北海道のシンボルというのはいろいろな所で使わせてもらっていますが、ただの野球場・BPではなく、北海道の魅力や良さを発信できる拠点にしていきたい。その一方で、道民に誇りに思ってもらえるよう、地域の方々と信頼関係を築きながら一緒に作り上げていくことも必要だと思っています。

株式会社北海道日本ハムファイターズ
代表取締役社長

川村浩二さん



昭和36年、神奈川県生まれ。昭和58年、日本ハム(株)に入社。取締役執行役員関連企業本部長、代表取締役専務執行役員加工事業本部長などを歴任。平成31年3月、(株)北海道日本ハムファイターズの代表取締役社長に就任。



上野 これからは北広島市だけが良ければ良いという時代ではないと思っ
ています。北海道にはさまざまな
魅力がありますが、北海道全体の底
上げをするための新たなシンボルに
なるのではないかと思っています。
BPが出来ることによって、道民の
皆さんの一体感が生まれるとも思
います。昨年、近隣14市町村や関係機
関などで構成されたオール北海道ポ
ールパーク連携協議会を設立しまし
た。BPの価値や魅力をそれぞれの
まちに活用することで全体の底上げ

になると思っています。
川村 周辺地域そのもので盛り上げ
ていくというか、地域が連携しつづ
それぞれが価値を生み出せるように
働きかけることは非常に意義深いこ
とだと思っっています。与えられたも
のではなく自分たちで作っていくこ
とで、北海道のシンボルになると思
っています。

建設工事の着工

——道路や水道などの整備や土地の
造成工事が進んでおり、この春には
いよいよ新球場建設に着工すること
になります。今の気持ちは？

上野 今回の事業は、市としても過
去に経験のない挑戦だと思っっており
ます。正月の大学駅伝に例えると、
今はまだ序盤の鶴見中継所のあたり
かなと。新球場の完成が箱根に到着
した時だと思っっております。これか
らさまざまな課題が出てくると思っ
ています。BPが出来ること、道民の
皆さんの一体感が生まれるとも思
います。昨年、近隣14市町村や関係機
関などで構成されたオール北海道ポ
ールパーク連携協議会を設立しまし
た。BPの価値や魅力をそれぞれの
まちに活用することで全体の底上げ

ると課題も出てくるのではないかと
いう焦燥感が入り混じったような気
持ちです。

スポーツとまちづくり

——スポーツがまちづくりにもたら
す影響をどのように考えますか。

川村 スポーツには、する・見る・
支えるの三つがあるのではないかと
思っっています。スポーツが生活の身
近にあると、それぞれする方と見る
方と支える方がいろいろとつながり
ながら融合していく。そういうこと
に取り組むことによって、住む方、
集う方が元気になっていくのではな
いかと思っっています。まさにBPを
中核にしたまちづくりに取り組むと
いうことは、理念の具現化のよう
に思っっています。非常に意義のあ
ることだと思っっています。

上野 プロの選手と直接会うことが
できるというのは、人に大きな感動
を与えてくれるのではないかと思っ
ています。現在は、ファイターズと
の連携協定で小・中学校での体育授
業や30kmロードレースなどいろいろ
な事業を行っっていますが、子どもか
らお年寄りまで多くの皆さんが良
影響を受けているのではないかと
思っっています。

高齢者や障がい者も気軽に

——高齢者や障がい者などとBPに
ついて、どのように考えていますか。

川村 支えるということでは、今の
札幌ドームでもスタジアム内で案内
する高齢のボランティアの方など随
分いらっしやいます。新しいBPで
も、そういった方々に協力してい
だいて、球場の運営をしていかな
ければならないと思っっています。臨場
感のあるプロのダイナミックなプレ
ーを間近で見られるということ、高
齢者や障がい者が気軽に来場できる
環境を作りたい。その中で一つでは
なくさまざまな役割ができると思
います。野球そのものではなくても
少し体を動かそうかなという気持ち
になることもあると思っっています。
いろいろな循環がまちの中で出てく





るのではないかと思っています。
上野 市内をいろいろ回りますが、やっぱり高齢者の方々の期待は相当大きいと感じています。「B.P.期待しています」と握手を求められることもあります。健康寿命や心の豊かさといった点で、大きく貢献してくれると思っています。B.P.があることによって、市民の皆さんがまちに誇りを持つてくれるのではないかと思っています。

巻き返しを図る

——先日、新人団記者会見がありました。新戦力を加えたファイターズの今年に懸ける意気込みは？

川村 昨年は、けが人も多く順位も5位という悔しいシーズンでした。7月末まで順調だったのが8月、5勝20敗で大失速しました。課題点を明確にしながら、その対策にはもう手を打っているというのが今の状況です。一例で言えばやはり得点力不足ですが、それに対しては小笠原道大氏をヘッドコーチ兼バッテリーコーチで招へいすることや、メジャ

ーリーグで年間20本ホームランを打ったピヤヌエバ選手を獲得するといった対策を打つ。それから主力投手が随分けがをしてしまい、先発にリーフ投手を起用したり、1イニングごとの小刻みな継投でかわしたりということをしていましたけど、バークン投手の獲得や、ドラフト1位で即戦力の河野竜生が加わる。さらにけがをしたマルチネスや上沢が戻ってくれば随分変わってくると思います。そういう意味では来季何が何でも巻き返しを図って、フ

ンの期待に応えたいと思っています。
上野 今年は若い選手が活躍してくれてチーム力はアップすると思いますので、期待しています。

皆さんへのメッセージ

——2023年、北広島市に新球場ができることになりましたが、最後に市民の皆さん、道民の皆さん、ファンの方々にメッセージを。

上野 世界がまだ見ぬB.P.というのは、我々にとつて挑戦だと思っていますので、必ず成功させることが市民・道民の皆さんのためになると思っています。全力で2023年に向かっていくという気持ちでいっぱいです。

川村 北海道に拠点を移して16年、皆さん方の温かい声援に支えられながら、ファイターズは育てていただいたと思っています。その一方で真の道民球団になるために北海道のいろいろな地域に出向き、スポーツの普及や交流をしながら、共感と信頼の関係を地域と築くというをやってきました、それを我々はスポーツコミュニティ活動と言ってきました。今回のB.P.は、まさにその集大成だと思っていますので、ぜひとも成功させて北海道に今までの恩返



しをしたいと思っています。北広島市に対しては、新しいまちづくりという中でお役に立ちたいと思っています。またファンの方々には、従来の野球観戦だけではない、いろいろな楽しみを経験していただくことを考えています。例えば、札幌ドームはホームベースからバックネットまで25mあるのですが、これを15mくらいにして、臨場感のあるプレーを見られるようにする。レストランやビアホールを作って、野球を熱心に見る方だけでなく食事をしながら少し野球を見たい方にも満足していただけのような、新しい観戦環境をつくり上げてそれを体験し、喜んでいただきたい。繰り返しになりますが、成功することが全ての関係者を幸せにできることだと思っております、しっかりと準備して成功に導きたいと思っています。